



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	内陸アラスカ・クスクィム川上流域におけるサケ漁撈史と現代的課題
Author(s)	近藤, 祉秋
Citation	北海道立北方民族博物館研究紀要, 28, 7-31
Issue Date	2019
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73929
Type	journal article
File Information	A History of Salmon Fishing and Contemporary Issues.pdf



<論文>

内陸アラスカ・クスクィム川上流域における サケ漁撈史と現代的課題

近 藤 祉 秋*

<Research Paper>

A History of Salmon Fishing and Contemporary Issues in the Upper Kuskokwim Region, Alaska, U.S.A.

Shiaki Kondo*

In this paper, I describe a history of indigenous salmon fishing technologies and management issues in the Upper Kuskokwim region, Alaska, U.S.A. As a traditional food, salmon has been an important part of culture for the Upper Kuskokwim Athabascan people. Intensive contacts with non-Natives in the early 20th century brought some changes to Upper Kuskokwim people's subsistence technologies including fishwheels, which made it possible to obtain large amount of salmon efficiently in silt-laden main streams of the Upper Kuskokwim tributaries. Conflicts with non-Native wildlife management regime began after Alaska's statehood when the State banned salmon fishing technology which involves blocking the entire width of a river or stream. As a result, Upper Kuskokwim people were forced to abandon their fishing weirs and fences at Salmon River since the late 1960s. After a decade or so, subsistence salmon fishing with rods and reels resumed at Salmon River. Nowadays, Salmon River Culture Camp has been organized by Nikolai Village Council to revitalize their fishing traditions. Since the 2010s, severe decline of king salmon populations in Alaska and Yukon has become a serious issue in indigenous societies of the areas. Local people think that commercial fishing (including bycatch) in high sea negatively affects the king salmon populations, while some others point out that increased activities by beavers and low-level of water in interior rivers might have been causing disruption of salmon's upstream migration. Through my observation of people's activities in salmon spawning areas, I argue that making a small opening to beaver dams (instead of totally destroying them) may actually benefit spawning salmon populations.

* 北海道大学アイヌ・先住民研究センター 助教 (Hokkaido University)

キーワード 資源管理、漁具、文化キャンプ、気候変動

Key Words Resource management, Fishing gears, Culture camps, Climate change

1. はじめに

「私たちの未来を守ろう、私たちの自給自足的な生活様式 (subsistence way of life) を守ろう」。これは、内陸アラスカ先住民の利益を代表する非営利組織タナナ・チーフズ・カンファレンス (以下TCCと表記する) のニュースレター『ザ・カウンシル』2015年1月号の巻頭に記載されたスローガンである。このニュースレターの表紙には、ユーコン川と思われる大河を写した写真が使われていて、川面を滑るように疾走するモーターボートの姿と川岸には陸揚げされた捕魚車が見える。巻頭の記事では、この号が出版される数年前から続くアラスカ全体でのマスノスケ遡上数の記録的な減少が取り上げられており、内陸アラスカ先住民社会の文化継承にも関わりかねない大きな問題であることが示唆されている (Tanana Chiefs Conference 2015:1)。

このニュースレターは、内陸アラスカ先住民社会の漁撈に対する考え方を表現したものとして興味深い。サケ漁撈は先住民としての「伝統」や「文化」を体現するものであり、TCCはサケの個体数を守りながら、生業権の (再) 獲得・維持のために主流社会に対してアドボカシー (政策提言) 活動を強化していくと述べる。ここには、非先住民の抑圧的な資源管理政策に対抗して、先住民の権利を守ろうとする政治的な意志が読み取れる。他方で、モーターボートと捕魚車が映った大河の写真から読み取れるのは、非先住民社会との接触によって導入された技術を柔軟に取り入れながら漁撈実践をその時々状況にあわせて組織化してきた姿である。

本稿では、内陸アラスカ・クスコクィム川上流域におけるサケ漁撈・管理の技術史をひもときながら、漁撈対象種の減少と「伝統文化」の次世代への継承という2つの現代的課題に対して、現地の人々がどのように対応しているかを民族誌として描き出すことを目的としている。とりわけ本稿で記述の焦点が当たるのは、現地の先住民社会によるマスノスケ漁撈の拠点とも言えるサーモン川であり、その川を誰がどのように利用できるかについての交渉が描かれる。

ユーコン川流域のサケ管理を調査した井上敏昭 (2008:61-66) によれば、中流域で生存漁撈をおこなうグイッチン社会は、みずからとは異なるパラダイムでサケを理解する自然資源管理行政との対立、サケを商業漁業の対象としてきた下流域の社会との対立、国際河川であるユーコン川におけるアメリカ合衆国とカナダの対立という3つの大きな課題に直面していることを指摘した。井上は、このような複雑に対立軸が絡み合った状況を解決するために、伝統知と科学知の両方に明るいグイッチン人の代表者が活躍していることを報告している (2008:66-67)。2010年代の記録的なマスノスケ遡上数の減少が問題となったとき、ユーコン川流域の32の先住民政府が集まって、「ユーコン川流域先住民政府間漁業委員会」 (以下YRITFC) が設立された。YRITFCやその前身の組織では、利害が対立しやすい下流域と中上流域の間で交渉が決裂しないように配慮しながら、流域における先住民社会の「一つの声」を形成することが目指されているという (井上 2015:198-200)。

井上の議論は、グイッチン人のサケ漁撈や分配に関する調査に基づきながら、流域内のサケ管理に関する分析では共時的な集団間の交渉と連帯の構築に焦点が当てられている(井上 2008; 2015)。流域面積80万平方キロメートルを超える国際河川のユーコン川を分析の対象とする上で、このようなアプローチは有効であると考えられる。他方で、クスコクィム川は、その流域に複数の先住民社会が居住する点ではユーコン川と共通するものの、流域はアラスカ州内に留まっている。井上が指摘するような資源管理行政や下流域との対立関係はクスコクィム川においても存在しており、本稿でも議論の対象としていくが、現地調査で得られたデータはその状況を理解するためにはより時間軸を意識した分析が必要であることを示唆している。本稿では、サーモン川を中心としたクスコクィム川上流域を主な舞台として、サケ漁撈と管理における技術的な変化について通時的な垂直軸の分析を試みる。

2. 調査地の概況

クスコクィム川は、アラスカ州内の内陸部から南西部沿岸にむかって流れ、ベーリング海に注ぎこむ全長約1,130キロメートル、流域面積約124,319平方キロメートルの河川である。ユピック・エスキモーが河口から中流域の住人であり、北方アサバスカン集団は上流域に居住してきた。その中でもデギタン人、内陸デナイナ人が中～上流域に住み、ディチナニク人(クスコクィム川上流域人)はさらに川上の地域を生活圏としてきた。

本稿でおもにあつかうニコライ村は、現在実質的に無人状態となったテライダ村とともにクスコクィム川の最上流域(図1)にあり、クスコクィム川上流域アサバスカ語を話すディチナニク人¹⁾の本拠地であると考えられる。彼らはナ=デネ語族アサバスカ諸語に属するクスコクィム川上流域アサバスカ語を話す人々のことであり、西はアラスカ山脈、東はクスコクィム山脈、南はスイフト川、北はカンティシュナ川で囲まれた3万5千平方キロメートルにのぼる広大な領域で生活を送っていた。本稿でクスコクィム川上流域と言う時、この領域が想定されている。

人類学者エドワード・ホスリーによれば、全体で250～300名ほどのディチナニク人が6つほどのバンド(おもに血縁者・姻戚から構成され、ともに暮らす集団)に分かれていた(Hosley 1966)。ニコライ村は、そのうちのトンゾナ川のバンドが核となって成立した。ニコライ村の人口は94、世帯数は37であり(合衆国国勢調査局、2010年)、現在ではディチナニク人のほかにも、ユピック・エスキモーやヨーロッパ系アメリカ人も少数ながら村に居住している。当該地域は、シロトウヒ、クロトウヒ、バルサムポプラ、パピリフェラカンバなどの植生を有する亜極北気候帯に属し、6月～8月の夏季には摂氏30度ほどまで気温が上がるが、冬季には摂氏マイナス50度以下になることもある。クスコクィム川上流域では、マスノスケ、シロザケ、ギンザケの3種が初夏から晩秋にかけて遡上する。現地語であるクスコクィム川上流域アサバスカ語では、「サケ」の範疇はなく、3種はそれぞれ、独自の名

前で呼ばれている（マスノスケ：*gas*、シロザケ：*srughat'aye*、*nolaya*（遡上前期のもの）、ギンザケ：*nosdlaghe*）。

本稿で用いられるデータは、2012年7月から2016年8月にかけて、ニコライ村をはじめとするクスコクィム川上流域およびアンカレジ、フェアバンクスなどのアラスカ州都市部でおこなわれた14か月間の民族誌調査によって得られたものである。

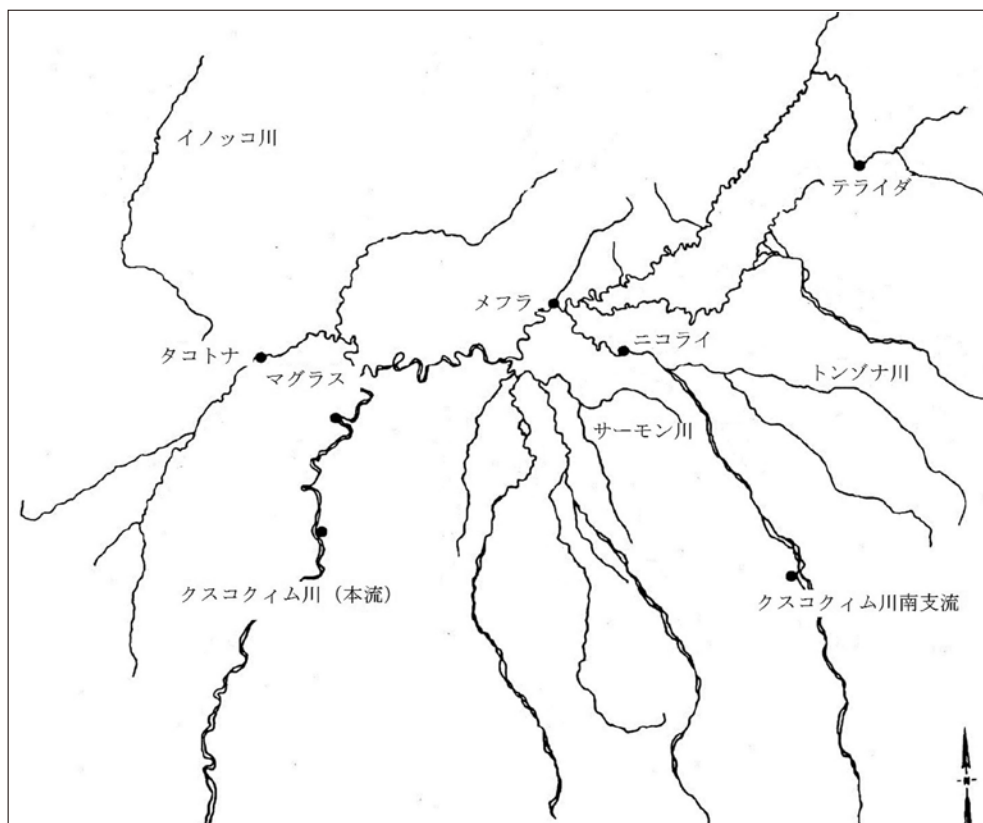


図1 クスコクィム川上流域の村と河川 (Stokes 1985:5より一部改変)

3. 接触以前および早期の漁撈技術

ロシア人やアメリカ人との接触以前および接触後初期（20世紀初頭まで）には、ディチナニク人は高地におけるカリブーなどの狩猟と漁撈を組み合わせた生活を送っていたと考えられる。この時期、漁撈技術としては、獣皮もしくは植物繊維で作られた魚網、ヤナ、鉾、すくい網が用いられていた他、遡上地で弱ったサケを手づかみで捕獲することもあったようだ (Collins 2004:13)。

人類学者コーネリアス・オスグッドは、北方アサバスカン集団の地域分布をまとめた論

考において、太平洋に流れ込む河川流域の集団（以下、「太平洋集団」と表記する）は遡上してくるサケを利用できるため遊動性が低いが、サケが遡上しない北極海に流れ込む河川流域（以下、「北極海集団」と表記する）の集団はより遊動的な社会構造をしていると主張した（Osgood 1936:20-21）。エドワード・ホスリー（Hosley 1977）は、オスグッドの議論を再検討して、白人社会と接触する以前には太平洋集団においても大型獣の狩猟のほうがより重要であり、漁撈は補佐的役割を担っただけであると論じた。ホスリーによれば、サケに依存する太平洋集団の生活様式は、白人社会から持ち込まれた技術によって低地の本流部での漁撈が可能となって以降に登場した比較的新しいものである。オスグッドが提案した太平洋集団と北極海集団間の差異は、あくまでも歴史的に生成されたものであるとホスリーは考えているようだ。

しかし、近年、ホスリーの議論をくつがえすような考古学的な発見がなされている。2012年10月、クスコクィム川上流域のマグラス村付近で600～700年ほど前のものと見られる遺体3体が発見された。クスコクィム川上流域の先住民機関（MTNT社など）による許可のもと、TCCが雇用する考古学者やアラスカ大学フェアバンクス校に勤務する自然人類学者が調査を実施した²⁾。3名の遺体はそれぞれ30歳、20歳、2～3歳前後であったと見られる。骨コラーゲンの同位体分析によれば、彼らは海洋性タンパク質を多く含む食事をしており、サケを頻繁に利用していたのではないかと推測されている³⁾。なお、付近からはイヌ、クマ、ビーバー、カワメンタイの骨も見つかっている（Halffman et al. 2014）。

白人との接触前の内陸アラスカ先住民社会においてもサケが盛んに利用されていたことを示唆するデータは、ホスリーの議論を部分的に再検討する必要があることを告げている。私は、ホスリーが白人との接触以前の漁撈技術として、ヤナや漁網を想定する一方で遡上地付近で死んだり弱ったりしたサケの個体を手づかみで捕獲する習慣を考慮していなかったことを指摘したい。ディチナニク人のミスカ・ディアフォンが幼少期を回想した語りによれば、夏にクスコクィム川上流域の南支流をさかのぼって、狩猟行に出かけた一行は、産卵後に死んだマスノスケが川岸に打ち上げられたのを見かけて、それを回収して、解体・調理したことがあった。彼によれば、産卵後に死んだサケを見かけたらそれを回収するべきであり、近年、人々が遡上地で死んだサケを放置しているのは良くないことであるという（Collins 2004:19, 23）。また、私は、2014年10月にディチナニク人の猟師たちとサケの遡上地に出かけた際、ある若い猟師が動きが鈍くなっているギンザケを見つけて、小型獣用の20.20口径ライフルで撃ったのを見た（写真1）。その猟師はサケを持ち帰り、イヌの餌として利用した。

あくまでもミスカ・ディアフォンの回想は1920年代頃、私の調査は2010年代のものであり、接触以前もしくは初期の生業活動そのものを示したものではないが、サケ拾いの実践は理論的にはどの時代にも可能であることは言える。ホスリーの議論は、パレオインディアン集団を大型獣の狩猟に特化した集団として考える従来の理解を踏まえたものであり、

カリン・ホフマン（Halffmann et al. 2015）らが指摘するようにこの理解は今後大きく変更される可能性がある。



写真1 瀕死のサケを銃で撃って捕まえた青年（2014年10月17日、筆者撮影）

ただし、ホスリーの議論には重要な論点が含まれていることも確かである。ホスリーは、ゴールドラッシュ後の時期に導入された捕魚車がクスコクィム川上流域の人々に大きな影響を与えたことを指摘した。この点は、ゴールドラッシュ後の大きな生活再編の動きと連動したものであり、節を改めて論じることとする。

4. ゴールドラッシュと捕魚車の導入

1867年、アラスカにおけるロシア帝国の権益がアメリカ合衆国に売却された。いわゆる「アラスカ購入」のことである。19世紀後半から始まるアメリカ合衆国による本格的なアラスカへの介入は、当地を資源が眠る「フロンティア」として見る考え方に基づいていた（現在でもこの考え方が主導的であるとも言える）。開発の対象となったのは、毛皮、金、サケであり、サケはそれ自体が利益を生む資源でもあり、毛皮や金を得るために利用できるものでもあった。

アラスカにおけるサケ漁業のための開発が本格化した背景には、現在のカナダ・ブリティッシュコロンビア州、アメリカ合衆国のワシントン州・オレゴン州を通るコロンビア川のサケ資源が1880年代には商業漁業者の乱獲によって枯渇してきたことが挙げられる。アラスカは新しい「フロンティア」として注目を集めた。1892年には、28のサケ缶詰工場や加工会社が協同組合を作り、「アラスカ缶詰協会」が設立された。翌年には、「アラスカ缶詰業者協会」と改称され、当時のアラスカのサケ缶詰産業の7割近くを占める生産量を有

するようになった。政府の役人がこの地域を訪れるようになったのは1890年代前半のことであった (Arnold 2008:56-57)。

しかし、連邦議会を通過したアラスカの漁業規制に関する一連の法律 (1889年～1906年) は、実質的にはほとんど効力を持たなかった。缶詰工場が置かれたのは、主に東南アラスカの沿岸地域であったが、この時期に商業漁業者の漁場を訪れた漁業監視官は、サケの産卵床に直接網やワナをしかけたり、サケが遡上する川を柵などで完全に塞いだりといった多くの法律違反を確認している。19世紀末から20世紀初頭に東南アラスカで操業した商業漁業者は、刺し網、巾着網、定置網 (魚罌) を利用していた。刺し網と巾着網は可動式の漁具であり、アラスカ先住民 (おもに沿岸に住むトリングット) と白人の零細漁民によって使われたが、大規模な資本家によるサケ漁業では、より効率的な定置網が用いられた。零細漁民から見れば、資本家が利用した定置網は、良い漁場を独占して根こそぎ獲ってしまう破壊的な漁法であり、コモンズとしての漁場を不当に占拠するものであった。前述したコロンビア川では、零細漁民と資本家の間ですでに大きな対立が起きていて、それがアラスカにも飛び火したことになる (Arnold 2008:60-61)。対立の最中、1914年にサケ漁業に関する調査がおこなわれて、サケが遡上する際に倒木や岩、ビーバーダムなどが障害となっており、個体数減少につながったという見解が示された。この見解は、サケ漁業に対する規制を少しでも減らしたいサケ産業界にとっては都合のよいものであり、それ以降、サケの遡上の障害となっていると考えられた倒木、岩、ビーバーダムなどを河川内から撤去する「河川改善」事業がサケ資源の保全対策として実施されるようになった (Arnold 2008:87-90)。

サケ缶詰産業における資本家と零細漁民のコンフリクトは、19世紀末から20世紀初頭の時点では、おもに東南アラスカの沿岸地域で生じていたと考えられる。アラスカの中央部 (内陸部) では、アメリカ人の大規模な流入が起きるのはゴールドラッシュの時期であった。1896年、カナダ・ユーコン準州のクロンダイクで金が発見されると、大富豪を夢見る人々が大量に押し寄せた。1899年、アラスカ地区 (当時) のノームで大量の砂金が見つかった。これによって、カナダ側のユーコン川流域に来ていた山師たちがアラスカに殺到する。その後、1902年にはフェアバンクス、1906年にはイノッコ川流域でも金が見つかり、ゴールドラッシュにともなう山師の大移動が繰り返された。

ゴールドラッシュによって大勢の人がやってきたことで、交通と物流のためのネットワークを整備する必要性が高まった。1899年の時点では、アメリカ人は内陸アラスカの地理について不案内な点が多く、ゴールドラッシュに沸くユーコン川流域にアメリカ合衆国内の領土だけを通っていく方法を見つけるために陸軍の探検隊が組織されたこともあった。この探検隊は、アラスカ山脈を越えた後、クスコクィム川上流域で遭難状態となり、テライダ村のチーフ・セスーイによって保護された後、無事にタナナ川の陸軍駐屯地に到着した (Collins 2004)。後に続くさまざまな探査の結果、20世紀初頭にはアンカレジから

アラスカ山脈を越えて、クスコクィム川上流域とイノッコ川流域を経由してノームへと至る現在のアイディタロッド・トレイルの原型となる交通路ができあがる。この交通路は、舗装されておらず、犬ぞり・馬そり・徒歩での移動を想定していた。トレイルの各所には、ロードハウス（roadhouse）が設けられた。ロードハウスとは、トレイルの途上にあり、トレイルの利用者に食事や宿泊場所を提供する施設のことである。また、蒸気船を利用した交通も盛んになり、ゴールドラッシュに沸くイノッコ川流域への物資輸送の拠点として、1907年にマグラス村が誕生する。ここには交易所と鉱山開発の登記をするための事務所があり、村名は初代の保安官であったピーター・マグラスの名前に由来している（Collins 2004:54-55）。

蒸気船による河川交通や犬ぞり用のトレイルに代表される内陸アラスカのインフラストラクチャーが徐々に整備される中で、クスコクィム川上流域にすむディチナニク人は、白人社会との恒常的な接触を経験するようになった。ゴールドラッシュ以前には、ディチナニク人はひとつの川筋を拠点とするバンドを社会の構成単位としており、クスコクィム川上流域には5～6のバンドがあったとされる。アメリカ人が持ち込んだ伝染病はゴールドラッシュのあった20世紀初頭に甚大な被害をもたらした。人口の半分以上が命を落としたという説もある（Hosley 1966:169-170）。生き残ったディチナニク人は被害が比較的少なかったバンドに合流し、交易所へのアクセスがよいクスコクィム川の本流部（低地部）に半定住的な村落が成立する。ロシア正教の教会が村人の手によって建設されたのも1910年代である。

ディチナニク人は、新しい時代の動向にいち早く適応したと考えられる。蒸気船の運行には大量の薪が必要であり、薪の伐採をするための雇用があった。また、トレイル上のロードハウスでは、人間とそりを曳く犬のために大量の食料が必要であったし、ロードハウスを切り盛りする人材も不足していた（Collins 2004:57）。トレイルを利用した冬季の郵便配達が行われるようになった（Schneider 2012:67-69）。食料や薪の獲得に長けたディチナニク人は、貴重な労働力として見なされるようになった。彼らの側から見れば、アメリカ人との雇用関係に入ることによって、現金を獲得し、ライフル、弾薬、鉄斧などの工業製品を手に入れることができた。

このような時代の趨勢の中でディチナニク人の漁撈は新しい技術を受け入れる。それは、捕魚車のことである。捕魚車は水車のような仕組みをもつ設置型の漁具である。川の流れを動力源として、カゴが回り、カゴがすくいあげた魚はそのまま回収用の箱の中に落ちるようになっている。この技術が利用可能なのは、時期としては川が流れている解氷期（5～10月）のみであり、場所としてはシルトで濁った川の本流部である。川の支流部では、水が透明なところもあり、そのような場所では魚が仕組みを見ることができると、有効ではない。カナダ・ブリティッシュコロンビア州などを通るコロンビア川でも、捕魚車が

商業漁業の漁具として利用されていたようである (Arnold 2008:56) が、内陸アラスカに山師が入ってきた時にも効率的に食料を獲得するための手段として導入されたと考えられる。

クスコクィム川上流域で初めて捕魚車を作ったのは、リー・アトウォーターという白人の男であった。彼は、イノッコ川流域にあるホリカチュック出身の女性と結婚しており、1910年頃にイノッコ川流域から現在のマグラス村付近へやってくる (Collins 2004:28)。この男も、ゴールドラッシュの時期にアラスカにやってきた山師の一人であると考えられるが、この時期には山師や鉱山労働者相手に捕魚車で捕獲したサケを売るビジネスを考えていたようだ。しかし、この事業は当初、繁盛したが、次第に新鮮な魚への需要がなくなり、捕魚車は1915年頃にはヴィナサーレの村人に譲られたという。これ以降、クスコクィム川上流域でも、盛んに捕魚車が作られ、運用されることになる (Stokes 1985:214-215)。

捕魚車は、1910年代から1980年代頃まで、ディチナニク人の漁撈において欠かせないものとなる。捕魚車がヤナや銚などの在来技術と違うのは、クスコクィム川の本流部でも有効である点である。銚は、水が透明な支流部でのみ有効であり、氷河由来のシルト (沈泥) で濁った水が流れる本流部では効果を発揮できない。ヤナや獣皮・植物繊維製の魚網も、水量が多い本流部では長時間使用できないという弱点があった (Collins 2004:13)。現在では、化学繊維製の魚網を使うことでクスコクィム川の本流部でも漁撈を継続的にこなうことができるが、本流部での漁撈を飛躍的に効率化する捕魚車はその当時画期的なものであったと言える。

結論から先に言えば、この時期の変化は高地 (支流部) での狩猟と漁撈を基にした生活様式から、食料の自給率は非常に高いものの、狩猟具や漁具、生活用品に関して外部者からの供給に依存する低地 (本流部) における混合経済の生活様式へと徐々に移行するものであるとまとめることができる。白人の持ち込む鉄製製品が生活必需品となると、交易所に近い低地に滞在する時間が長くなる。しかも、その間の食料調達に関しては、捕魚車が導入されることで効率的に進めることができるようになった。さらに追い討ちをかけるように、高地部であるアラスカ山脈の麓付近に生息していたカリブーの個体数が1920年代には激減してしまう。19世紀後半にはアラスカでも見るようになったヘラジカは低地の本流部にある湿地帯にも多く生息するため、狩猟対象獣が高地のカリブーから低地のヘラジカへと次第に変化していった (近藤 2016b:310-312)。この時期にカリブーの個体数が大規模に減少した理由としては、連発ライフルの導入が挙げられている。ホスリーは地元住民がカリブーを乱獲した可能性に言及している (Hosley 1966:204) が、その証拠は後世の住民の語りに基づくのみであり、真偽は不明である⁴⁾。もし、仮にホスリーが言うように地元住民の乱獲が原因であったとしても、ロードハウス向けの獣肉や魚の販売が人々の現金獲得手段となったこと (Collins 2004:57) がその背景にあると考えられる。

20世紀初頭に登場した新しい生活様式において、サケは自家用および販売用 (1930年代

まで)に捕獲され、人、イヌ、毛皮動物(養殖場のキツネなど)の食料であった。そして、とりわけシロザケを捕獲することを主な目的として使用された捕魚車は、ニコライ村において犬ぞりの利用を現実的なものとする点において大きな変化をもたらし、結果的に人々を毛皮交易へと引き込むきっかけとなった。前述したようにゴールドラッシュの産物であるロードハウスは、1920年代には犬ぞり郵便の中継地でもあった。ディチナニク人の一部の人々も、犬ぞりによる郵便輸送の御者となる(Schneider 2012:67-69)。マスノスケは人間の食物として利用されたが、シロザケは主にイヌの餌であり、現在でも現地では英語で「イヌのサケ」と呼ばれている。ジェフ・ストークスによれば、この時期のクスコクィム川上流域でおこなわれた販売目的の漁業で得られたサケは、そりを曳くイヌの食料として、および毛皮動物を飼育する養殖場で利用されたという(Stokes 1985:215; cf. Clark et al. 2006:105)。

1930年代には、飛行機を利用する郵便輸送が普及して、ロードハウスは閉鎖された(Schneider 2012)。この時期以降、クスコクィム川上流域の漁撈で得られた魚は、自家用に利用されるのみとなる。しかし、捕魚車は引き続き利用されて、毛皮動物の罠かけをするときに必要な犬ぞりや鉄製罠と共にこの時代の「3種の神器」と呼ぶべきものとなる。毛皮を売って得た現金で生業活動や生活に必要な用具を買い、狩猟や漁撈によって食料を調達する混合経済の生活様式がこのように定着していった。

5. アラスカ州の成立とヤナの禁止

1959年、アラスカは「準州」から「州」へと昇格する。このことは、非先住民の零細漁民にとっての念願事項が達成されたことを意味した。以前には、サケ漁業の管理権は連邦に属していたが、アラスカが州になった翌年、州内のサケ漁業の管理権はアラスカ州に委譲された。産業規模の漁業をおこなう資本家と零細漁民の対立は19世紀後半からずっと続いており、資本家は州外に経済的な基盤を持った上でアラスカで操業をおこなっていたが、零細漁民は先住民、移民ともにアラスカ在住者が多かった。そのため、州に管理権限が委譲されることは、州外者である資本家よりも州在住者である零細漁民に有利な(はずであった)改革をもたらした。ひとつは、対立の根源となっていたサケ定置網を駆逐することであった。住民投票により審議された州憲法の第3条は、「商業漁業に従事する者たちの間の公平な競争を保証」し、「急速に減少するサケ資源を保全」するために「漁業用の罠」を禁止するという内容になっている(Arnold 2008:156, 159)。

しかし、クスコクィム川上流域では、「漁業用の罠」禁止令が生存漁業をおこなうディチナニク人にとって思わぬ結果をもたらす。この当時からすでにサケ減少に危機感を抱いていた資源管理当局は、サケ管理権が委譲された1960年以降、上流域で実施されているヤナ漁を取りやめるように圧力をかけるようになった。当局の論理では、ディチナニク人が使うヤナは、川岸を端から端まで覆い、遡上するサケを一網打尽にするためサケ資源の枯渇

につながるということであった。その結果、1966年を境にマスノスケをおもな対象としたサーモン川などの漁場において、ヤナ漁はおこなえない状況となった (Stokes 1985:213)。

ディチナニク人が使うヤナは、以下のような手順で作られ、使用されていた (図2)。2～3フィートごとに杭を川底に打ちこんだ後にトウヒ製の柵 (高さ10フィートほど) を川岸の対岸まで渡し、杭に固定する。その中央部には、囲いとなる空間が作られ、その囲いに接続するように18～30フィートほどの長さの流線型のカゴ罟が川下側に取りつけられる。遡上するサケは川下側からやってきて、柵によって足止めされる。サケは、囲いの空間から川上に抜けられそうに見えるので柵の隙間から囲いに入る。しかし、そこにも柵が続いているので川上に進むことができない。引き返そうとして、流線型のカゴの中に入り、進んでいくと次第にカゴが狭くなり身動きが取れなくなってしまう。泳ぎ疲れたサケが罟の先端部に流れていくと、漁師はカゴに取り付けられたドアを開け、そこから銚や鉤を使ってサケを回収する (Stokes 1985:382-386)。

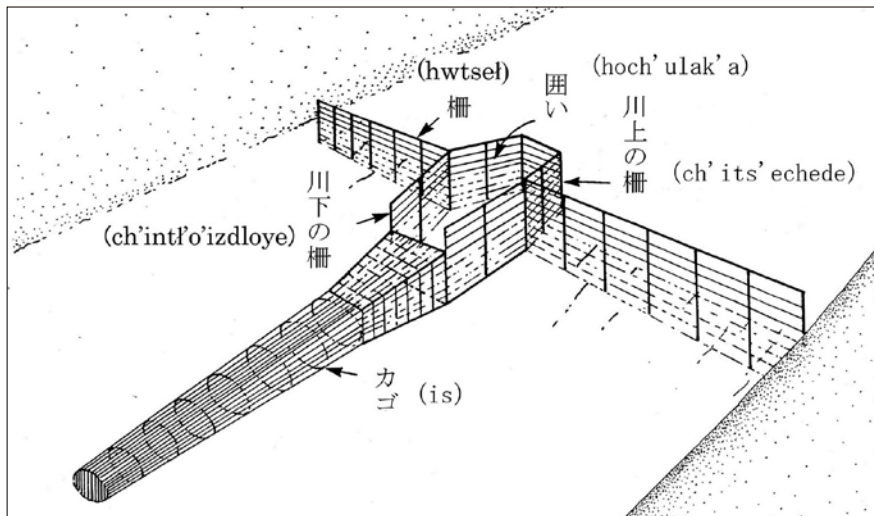


図2 クスコクィム川上流域で使用されたヤナの模式図と現地語による部位名称
(Stokes 1985:383より一部改変)

このような漁法をおこなっていたディチナニク人にとって、ヤナ漁禁止の決定は到底容認できないものであった。当局が指摘したヤナによる一網打尽の捕獲は、実質的に不可能であると人々は考えている。木製のヤナは、マスノスケの遡上期間中にずっと水中に入れておくことはできず、水流やサケの動きによってカゴや柵が壊れるので修理のために頻繁に川から引き上げる必要があった。また、漁師たちも、一旦カゴの中が一杯になると、仕掛けを引き上げ、漁獲したサケの処理が終わった後に再び仕掛けをセットしていた (Stokes 1985:386-387; Holen, Simeone, and Williams 2006:95-97)。これは、サケをずっとカゴの中

にとどめておくと、サケが暴れてカゴが壊れてしまう可能性があることを考えると合理的な判断と言え、資源保護の観点からも評価されるべきやり方である。これらの事例を踏まえると、ディチナニク人の生存漁撈は、天然素材をベースとした漁具を用いており、あくまでも数世帯の共同作業によっておこなわれていた点において一定数の獲り残しがあることが担保されていたため、持続可能な漁撈を可能とする仕組みが内在されていたと言える。同じく「漁業用の罟」に分類されるような漁具を使っていたとしても、大規模な捕獲と処理を同時並行でおこなえるほど豊富な労働力を動員し、漁具の修理にも事欠かなかった資本家の漁業とは大きく異なる性質のものであったことは間違いない。なお、捕魚車に関して言えば、河川の端から端までを覆う類の漁具ではなかったことから、漁業規制の対象とはならなかった。クスコイム川上流域では、1980年代頃まで捕魚車はそり犬の食料獲得を目的として頻繁に利用された。

何にせよ、ヤナの使用を禁じられたディチナニク人は、しばらくマスノスケ漁から遠ざかっていたと考えられる。ヤナが使用されていたサーモン川には、マスノスケが遡上する夏の時期にニコライ村から徒歩で行くためのトレイルがあった。そこは、クスコイム川とサーモン川の間にある湖沼地帯を縫うように進むルートであり、私の聞き取りでも1960年代までこのトレイルが使われていたのを複数の古老から確認している。ストークスによれば、ヤナのかわりに釣竿を使った生存漁撈がサーモン川でおこなわれるようになったのは、1970年代後半のことであった。しかし、サーモン川でのマスノスケ漁撈が再開されてから、ディチナニク人の漁師は、マスノスケ遡上数が大きく減っていることに気づく。人々の要請を受けて、調査用ヤナを使ったマスノスケ遡上数の調査がアラスカ州鳥獣・魚類局商業漁業部門によって1981年から2年間実施されるが、予算カットのため廃止されてしまう(Stokes 1985:224-226)。クスコイム川流域における飛行機を利用した上空からの遡上数調査は、1970年代からおこなわれていた(Clark et al. 2006:112)。調査用ヤナを使った調査はより正確な数がわかるという利点を持つが、膨大な予算を必要とする。なお、1988年には、現地住民の声をサケ管理に取り入れるために「クスコイム川サケ管理作業部会」が組織され、下流域から最上流域までの先住民社会、加工業者、商業漁業者、スポーツ漁業者、資源管理当局などが集う会議の場が設けられている。

クスコイム川上流域の人々は、マスノスケ減少の理由が1960年代以降、本格化してきた下流域と海洋における商業漁業での乱獲であると考えていた。しかし、ヤナ調査の取りやめに加えて長期的な遡上数調査がないことから、原因の究明はなされないままであった(Stokes 1985:228-230)。上流域の人々(ディチナニク人)からマスノスケ減少の原因のひとつとされた下流域の商業漁業には、地元のユピック・エスキモー漁師も参画しており、彼らの貴重な現金収入源となっていた(cf. Clark et al. 2006:109)。しかし、サケの商業漁業と生存漁業をおこなうユピック・エスキモーの漁師自身は、当時アメリカの排他的経済水域の中で操業が認められていた日本の漁船(母船式サケマス漁業)⁵⁾が操業規定の違反を

しながら漁獲しているのがサケ減少の主因であると考えていた (Sparck 1987)。高度経済成長期からバブル経済期にかけて、日本人はアラスカ産のサケを珍重したことは事実であり (日本貿易振興機構 2009)、操業規定を違反していた漁業者がごく一部いた可能性はある。沿岸から遠く離れたマグラス村でも、1970年代に日本人向けにシロザケを獲ってイクラだけを売りさばく者がいたと聞いたことがある。現在のマグラス村ではそのようなイクラの売買はおこなわれていないが、その当時はサケに高い値をつける「日本人の強欲さ」が話に上がっていたという。

アラスカ先住民と日本人は、複雑な歴史を歩んできたと言える (野口 2018)。第2次世界大戦中の日本軍によるアッツ島侵攻は、アラスカ本土の先住民にとっても大きな脅威と捉えられた。日本人によるアラスカ学術調査が1960年におこなわれたが、ネルソン島のユピック・エスキモーは、当初日本人研究者に対して強い警戒心を抱いていたと言われている (岡田1992:8)。日本人のサケ漁業がユピック・エスキモーによって大きな批判の対象となったのは、1970年代から1980年代にかけて日本とアメリカ合衆国の間で貿易摩擦が問題となっており、捕鯨批判を含むジャパンバッシングが国全体で激しく展開されていたことに加えて、第2次大戦に起因する日本人への不信感がアラスカ先住民の間で根強く残っていたことも影を落としていたと考えられる⁶⁾。

6. マスノスケ減少問題

6-1. 商業漁業との対立関係

2010年頃から、マスノスケ遡上数の記録的な減少が (またしても) 大きな問題とされてきたことはすでに述べた。前述したTCCでは、狩猟・漁撈タスクフォースを設けて、生業権を守るためのアドボカシー活動を推進している。TCCのニュースレターに載った記事では、TCC顧問の古老代表者や関係者が、この問題には複数の要素が関係していて、ひとつの原因に定めることができないという見解を表明している。ここで挙げられていた要因は、商業漁業による乱獲と混獲、気候変動、海洋酸性化、遡上地の環境変化、病気、海洋と河川の水温、遡上の障害物など多岐にわたる (Tanana Chiefs Conference 2015:4, 11)。

しかし、公式見解は、やや抑え目に書かれていると思われる。2015年3月にフェアバンクスでおこなわれたTCC年次大会では、クスコクィム川上流域の関係者10名弱が集まる分科会にタスクフォースの代表がやってきた。彼は主な原因として、日本人と中国人を含む「アジア人」によるサケの商業漁業とタラ漁の際の混獲を挙げた⁷⁾。この時期、生業関連の会議に出席すると、「アジア人」の商業漁業をアラスカ先住民の生業権に対する脅威として批判するアラスカ先住民漁師の発言を頻繁に耳にした。このことは、ニコライ村でも同様であり、冬の時期に頻繁に催された酒宴の席では、マスノスケ減少問題の原因は「アジア人」の漁業であるとする見解を幾度も村人から聞いた (ただし、後述するように他の原因も村人は挙げている)。また、2000年代にクスコクィム川上流域で聞き取りをおこなった狩猟・

漁撈局の職員によれば、現地の人々はその当時から問題となっていたマスノスケ減少の原因として、クスコクィム川下流域と公海上の商業漁業、およびオオカミやクマによる捕食の増加を挙げている (Holen, Simeone and Williams 2006:89-90)。実際のところ、河口で漁撈を営む下流域の先住民社会はともかく、上流域に住む内陸アラスカ先住民の多くは下流域や公海上の商業漁業を直に視察した上でこのような発言をしているわけではない。それにもかかわらず、このような発言が繰り返されるのには、1980年代に生じた不漁期から、サケ管理の状況が根本的には改善されていないことへのやるかたない憤りがあることが考えられる。

6-2. サーモン川での動向

2015年3月のTCC年次大会では、もうひとつの動きがあった。分科会に鳥獣・魚類局の生物学者がやってきた。彼は、2015年の夏からサーモン川に調査用ヤナを設置して、33年ぶりにこの川でのマスノスケ遡上数調査をおこなう予定であることを発表したのだ。じつは、このことはすでにクスコクィム川上流域の4村落が作る合同会社MTNT社のニュースレターで報道されており、ニコライ村の出席者は新しい調査のことを知っていた。MTNT社はマグラス村に本部が置かれており、組織レベルでは必ずしもニコライ村との交流が盛んではない。ニコライ村評議会の事務管理担当者は、サーモン川を利用してきたニコライ村の評議会ではなく、マグラス村のMTNT社にまず連絡が行ったことに対して、少し不安を抱いている様子ではあったが、4月に地元への説明会を開くことが決まった。その後、4月15日にニコライ村で調査の説明会がおこなわれ、6月から8月までニコライ村の若者2名がサーモン川の調査用ヤナが設置された地点に泊まり込み、サケの遡上数を記録するために雇用された。

近年、サーモン川は「文化キャンプ」の開催地ともなっている。「文化キャンプ」とは、祖先たちが狩猟や漁撈の際に利用してきた場所に寝泊まりしながら、古老や年長者から「伝統文化」を実地で学ぶための取り組みである。2015年の場合、ドーヨン有限会社の資金援助のもと、「サーモン川文化キャンプ」が7月の1週間ほど開催され、ニコライ村の村人と子どもたちはマスノスケ漁とヘラジカ猟をおこなった (近藤 2016b)。

「文化キャンプ」の開催地としてサーモン川が選ばれるのには、いくつかの理由が考えられる。第一に、サーモン川は地域でマスノスケがもっとも豊富に遡上する漁場のひとつと考えられている。第二に、そのような好漁場でありながら (むしろ、だからこそ)、1960年代から続く資源管理当局とのコンフリクトの現場となっていることが挙げられる。前述したようにヤナ漁が禁止された結果、10年間ほどの空白期間を経て釣竿を用いた生存漁業がおこなわれるようになった。しかし、1980年代には、この漁場をスポーツフィッシングを目的として利用するニコライ村外の者もいて、食料獲得のためのヤナに代わる代替手段として釣竿を用いるニコライ村の人々と競合が発生した。当時、人々は同じ釣竿を使ってい

ることから、サーモン川での生存漁撈が誤って「スポーツフィッシング」と当局から認識され、規制の対象となるのではないかと恐れていた(Stokes 1985:231)。近年の「文化キャンプ」においても、釣竿を使った生存漁撈がおこなわれ(写真2)、漁獲されたマスノスケはすべて処理され、燻製もしくは生のままニコライ村に持ち帰られている。サーモン川での生存漁撈は、スポーツフィッシングで使用されるものと同じ漁具を使わざるを得ない点において外部者からの誤解に基づく批判を受けかねない。サーモン川の継続的な利用を将来にわたって確保するためにも、「文化キャンプ」として当地を利用することは有効な戦略であると考えられる。



写真2 文化キャンプで使う釣竿の調整作業 (2015年7月19日、筆者撮影)

第三に、「文化キャンプ」は燃料代の高騰が続く中で生業を続けるための手段ともなっている。現在、ニコライ村では1ガロン8～9ドルでガソリンが売られており、1回の漁撈・狩猟行ではボートでニコライ村から1時間ほどのところにあるキャンプへの往復に5ガロンを要する。サーモン川は、ニコライ村からの直線距離はさほど遠くないが、川伝いに進むと非常に遠回りになるため現在のモーターボートでも5時間はかかる。現金収入源が限られている中で「文化キャンプ」の名目でガソリンを漁師たちに配分することで実質的に生存漁撈の組織化が可能となっている。なお、前述したように、ニコライ村からサーモン川へと向かう夏のトレイルが1960年代まで使われていたが、2013年にそのトレイルを復活させる試みがあり、私も参加者5名の一人であった。当初の目論みとしては、トレイルの目印をたどり直し、新しく目印をつけた後で四輪バギーが通れるほどの道を作ることであった。残念ながら、トレイルの目印が途中で途切れており、サーモン川に徒歩でたどりつくことはできなかった(近藤 2014:53)が、燃料費の負担を減らしながら生業を続けることは人々にとって大きな関心事であることがわかる。

第四に、ヘラジカ猟との兼ね合いが考えられる。サーモン川では、マスノスケ漁撈の時

期にヘラジカ猟も同時並行でおこなわれていたとニコライ村の人々は語る。サーモン川をさかのぼっていくと、川幅がだんだん狭くなるので、夜にヘラジカが水を飲みに川岸に出てきたところを撃ついわゆる「流し」の猟法がやりやすく、川岸に近いところで解体すれば運搬も相対的に容易となる。しかし、マスノスケが遡上する6～7月は現在の狩猟規則ではヘラジカの禁猟期にあたる。「文化キャンプ」のような文化継承活動としてのヘラジカ猟は、事前に申請をすることで特例として猟期以外の時期でも認められているので、「文化キャンプ」という位置づけはマスノスケ漁とヘラジカ猟を同時におこなっていた時代の生業を現在の資源管理の枠組みの中で合法的におこなうほぼ唯一の方法である。2015年7月の「サーモン川文化キャンプ」においても、事前に申請書を送付した上で、マスノスケ漁と並行してヘラジカ猟がおこなわれた（写真3）。



写真3 文化キャンプにおけるヘラジカの解体（2015年7月20日、筆者撮影）

6-3. ビーバーの増加と乾燥化の影響

近年、ニコライ村の村人たちは、サケ以外にもホワイトフィッシュなど遡上性の魚類が全般的に減少していると訴えている。その理由としては、上に述べた理由以外にもビーバーの増加と河川湖沼の水位減少が持ち出されることがある。最近では、毛皮価格が下落したままであり、食料としてビーバーの肉を食べることも若者世代では少なくなってきた。ビーバーの生息数が増えることで、ダムが増えた。そして、近年観察される河川湖沼の水位減少と重なることで、ビーバーダムが魚の遡上を阻害するようになったとされる。ある古老は、ニコライ村からさらに上流にあるテライダ村周辺のホワイトフィッシュの減少に関して「ビーバーがダメにってしまった」と語る（Holen, Simeone and Williams 2006:92）。

私の調査でも、ビーバーダムの増加と河川水位の減少がマスノスケを含む遡上性の魚類全体に影響を与えているという見解を多くの村人から聞き取ることができた。さらには、私自身がビーバーダムによる魚類の遡上阻害と考えられる事例を体験したことがある。

2014年10月にニコライ村の猟師たちと共にクスコクィム川上流域南支流をさかのぼって進んだところにある支流でハイイログマ猟に2回同行した。そこは、ギンザケの遡上地であり、産卵後死亡したサケがところどころに散乱していた他、まだ川を泳いでいるものも10数匹ほど見かけた。この狩猟行では、ハイイログマやクロクマがギンザケを食べようと川岸にやってきたところを待ち伏せてライフルで撃つという方法が採られた。狩猟行の中で猟師たちと川岸を偵察して歩いている時に、突然2人の猟師が足を止めて、ビーバーダムの中央部付近を壊し始めた。私も加わって1時間ほどすると、ビーバーダムの隙間から水が流れていき、川下の水位が少しずつ上がっていくのが見えた（写真4）。5分ほどすると、赤い魚影がダムの隙間から川上に上がっていくのが見えた。ギンザケが遡上を再開したのだ。ある猟師は、「これでまた来年もサケが帰ってくる」と述べた。10日後に同じ猟場に戻ってきた時には、ビーバーダムは修復されて元通りになっていた（写真5）（近藤 2016a:91-92）。



写真4 ビーバーダムに隙間を空ける（2014年10月6日、筆者撮影）



写真5 ビーバーによって修復されたダム（2014年10月16日、筆者撮影）

ハイイログマ狩猟行における私の経験からわかるように、地元で狩猟と漁撈を続ける者からすれば、ビーバーダムが増加と河川水位の減少が魚類の遡上を妨げているという見解は実体験をとまなっている点で非常に強いリアリティを持っている。もちろん、私たちが観察したダムの隙間から泳いで行ったサケがその後、産卵に成功したかどうかは定かではないし、実際にダムに隙間がある期間にそれを超えて遡上を再開したサケは多く見積もっても数十匹であろう。この1回だけの行為でサケの遡上数に統計的に有意な差が出るとは思われない。だが、サケの遡上期間にクマ猟をするために遡上地に行くことは、サケの再生産にとってもっとも重要な時期に天敵による捕食と遡上阻害による被害を最小限にとどめる意味を現在でも持っているし、以前には「サケ拾い」によって人間もしくはイヌ用の食料獲得にもつながる活動であったと考えられる。

他方で、アラスカの魚類管理学者や生態学者は、ビーバーダムが増加にともなう遡上阻害という説明を受け入れないものが多い。1990年代から、ビーバーの活動によって、河川環境がサケの稚魚にとって好ましいものになるという研究が発表されるようになり、学界の常識となってきた。ビーバーが作るダムは、河川の流速を下げて、沈殿物がたまりやすい環境を作る。そのようにできた池は、サケの稚魚の餌となる生物が多く、稚魚にとって住みやすい環境であるという (Pollock 2004)。現在では、ビーバーの地域個体群が絶滅した地域に環境改善を目的として他地域のビーバーを導入する試みさえおこなわれている (Woelfle-Erskine and Cole 2015)。このような動向は、毛皮取引にともなうビーバーの乱獲やサケ保全のために河川内の障害物を取り除こうとする「河川改善」事業がサケの稚魚の生息地を破壊したという見解のもとに生じてきた。近年の魚類管理学者や生態学者にとって、アラスカ先住民が主張するビーバーダムによるサケやホワイトフィッシュの遡上阻害説は、一見20世紀前半の見解と近いように思われるため、古い考え方に聞こえてしまうのだ。

しかし、内陸アラスカ先住民が語る「ビーバーが（遡上性の魚類を）ダメにしまった」という見解は、そう単純なものではない。現在の漁業管理学で主張されているのは、あくまでもビーバーの活動によるランドスケープの改変がサケの稚魚にもたらす長期的な効果であるが、アラスカ先住民が主張しているのは遡上という短期間に限られた話である。ビーバーダムは、(漁業管理学者が主張するように) 長期的に見ればサケの稚魚にとって良好な環境をもたらすが、(アラスカ先住民が言うように) 遡上期という短期的なスパンでみればサケの成魚に悪影響をもたらすというように両者の説明は必ずしも矛盾しない。実際に私が同行した狩猟の際におこなわれたビーバーダムに隙間を空ける行為は、川下の水位が上がり、サケが通り抜けるのに必要なほどの隙間を作るにとどまっており、10日後にはビーバーによって元通り修復されていた。20世紀前半の「河川改善」事業のようなビーバーダムなどの完全な撤去と毛皮取引によるビーバーの大量捕獲とは、大きな違いがある。サケの遡上期間にのみクマ人もサケ遡上地に向かうのであり、そのときどきにだけ修復可

能な隙間を開けることは、稚魚の育成環境を担保しつつ短期的な遡上阻害の被害を最低限に抑える方法であると考えられる。

また、クスコクィム川上流域の人々が主張しているのは、あくまでも近年、河川湖沼の水位低下とビーバーの増加があわさることで遡上阻害が生まれていることである (Holen, Simeone and Williams 2006:92)。リモートセンシング技術を利用した研究では、不連続永久凍土地帯に属する内陸アラスカの各地でこの50年間に乾燥化・温暖化が進み、森林火災の増加・永久凍土の消失に起因する湿地・湖沼の減少が大規模に進んでいるという観察が示されている (Riordan, Verbyla and McGuire 2006)。この研究は必ずしも河川の流量を計測したものではないが、内水面の面積が減少していることを指摘している点でアラスカ先住民の観察に従うものである。テライダ村出身で現在ニコライ村に在住している一家は、近年、テライダ村に向かうときに河川の水量があまりにも少なく、モーターボートで通行できないのでやむなく引き返すという事態に何度も直面している。アラスカ中央部の内水面の状況について、詳細な水文学的な調査が必要とされている状況と言える。このように考えれば、村人が語るビーバーダムによる魚類の遡上阻害という説明は、ビーバーにサケ減少の責任を押し付ける時代遅れの見解ではなく、気候変動と社会変動が組み合わさって生じている現象を的確に捉えたものである可能性がある。

7. 考察

本稿では、漁撈史（漁業史）の観点から、クスコクィム川上流域におけるサケと人の関わりをひもといてきた。井上（2008）がユーコン川流域の事例から論じたように、クスコクィム川流域の先住民社会においても、上流域と下流域の対立、先住民社会と資源管理当局の緊張関係、漁業をめぐる国際関係といった3点が課題であると認識されていた。本稿では、これらの課題がサケの漁撈や管理にまつわる歴史的な変化の中で複雑に絡み合ってきたことが浮き彫りにされたとと言える。

本稿の内容を一言で表すならば、「誰／何がサケが遡上する川をせきとめる権利を有するのか」をめぐるポリティクスの熾烈さとそれがもたらす予測不可能な動きを示すものであったと言える。地域外の資本家による収奪的な漁業に対する漁民たちの闘いがクスコクィム川上流域では生存漁業に対する不当な抑圧をもたらし、それがめぐりめぐって、「白人のやり方」とも言われてきた釣竿でマスノスケを釣るキャンプが「文化キャンプ」となる。コロンビア川では資本家の収奪的な漁業を支えた捕魚車は、今ではアラスカ先住民の「文化」として積極的に推進されてさえている。漁業管理学者の視点から見れば、アラスカ先住民の人々はビーバーダムや倒木を撤去することで環境破壊を招いた20世紀前半の「河川改善」事業の信奉者に見える。

下流域の住人、国外の商業漁業者などがサケ漁業に関与している状況で、上流域の社会単独の努力で問題解決を図ることは到底不可能に近い (cf. 井上 2008:66)。本稿では、河

川湖沼の水位減少とビーバーの増加が組み合わさった魚類の遡上阻害という新しいサケ減少の要因を指摘した。これはさらに問題を複雑にする。気候変動はそもそも全球規模の出来事であるし、毛皮交易時代に絶滅しかけたビーバーは温暖化するアラスカ北西部で生息域を広げつつある (Tape et al. 2018)。ポリティクスは、多様な人間のアクター間の政治的な駆け引きだけでなく、激変する自然環境における人間とビーバーの間の協働と対立という側面も持ち始めた。そして、それは、科学知の生産者である漁業管理学者と在来知の守り手である先住民のビーバーに対する見解の違いを経由して、難問として立ちはだかっている。気候変動の影響研究という観点からは、生態系エンジニア種の生息分布が変化することにもなる陸域生態系のランドスケープ規模の変化が加速する仕組みを考慮する必要が生じたとも言えるだろう。

合意形成が容易に進まない中で先住民社会の自助努力は進んで行っている。野口泰弥によれば、カナダ・ユーコン準州のペリー・クロッシングでは、子どもへの教育のために漁撈キャンプを活用する取り組みにまつわる出版物の中で、祖先からの教えが気候変動という新しい課題に対処する上でも重要であると述べられている (野口 私信; Serkirk First Nations 出版年不明)。例えば、サケが減少している現状では、ウサギやライチョウのような小型鳥獣の狩猟を増やして別の食料源を確保したり、川の障害物を取り除いて遡上するサケを助けたりすることが必要であるとされる。漁撈キャンプは、コミュニティレベルでの気候変動に対する適応策が試行錯誤のうちに組み上がる場であるとも言える。他方でアラスカでは、TCCが健康増進プログラムの一環として「文化キャンプ」を推進しており、その一環としてニコライ村では、ビーバーの罨猟を学ぶキャンプが開かれた。これは、ニコライ村の人々がビーバー捕獲数の減少がサケ減少につながっていると考えていることを踏まえると、自分たちの力で問題を少しでも解決しようとする姿勢の表明であるとも言える。

最後に、サケ管理をめぐる国際関係について一言述べて、本稿を終えたい。「アジア人」と一括りにされて「密漁者」扱いされるのは、操業規定を守りながら漁業を営んでいる大多数の日本の漁師からすれば心外なことであろう。私自身は漁業者ではないが、ニコライ村に長期滞在した最初の「アジア人」として、このような言説を耳にするのは正直複雑な気持ちになる。ただ、会議の場でTCCの狩猟・漁撈タスクフォースの責任者が「アジア人」を槍玉に上げたのは、(是非はともかくとして) アラスカ内で「ひとつの声」をまとめあげるための方策であったのではないかとさえ思ってしまう。ユーコン川やクスコクティム川下流域の商業漁業には、アラスカ先住民が参画しており、内陸生まれの彼の本心は別としても河口の漁業者を批判するのは下流域に親戚や友人がいる者の反発を招く恐れがある。また、白人の商業漁業者のみを批判すると、そのような者と結婚している先住民女性から批判を受けるかもしれない。その意味でアラスカ内で手早く一致団結できるのは、「アジア人」批判であるとも言える。ここでは、北アメリカ北西部において、19世紀後半から先住

民と白人が中国人の移民によって漁業の雇用が奪われるのを恐れていたことを想起してほしい (Arnold 2008:69, 139)。

しかし、大規模な産業的漁業に対するこのような批判は、北極域を資源を汲みだすための「フロンティア」としてのみ理解して、そこに人々の生活があることを見て見ぬふりをする(した)一部の非先住民に対する批判としては理解できる。漁業のことではないが、最近、ある会合で日本の石油業界関係者が、近年注目されるヤマル半島の石油開発を指して、石油生産量が落ち込んでいる「アラスカの次はヤマルが来ています」という趣旨の発言をしたのを私は耳にした。石油を掘らなくなった後のアラスカはどうなるのか? そして、ヤマルの後は...? その人物によれば、石油開発は北極域に「文明」をもたらすとのことであるが、北極域に居住する多くの先住民社会が警戒するのは、そのような収奪的な資源開発が短期的な雇用と引き換えに(場合によって雇用は口約束だけのこともある)大きな環境破壊をもたらすことである。前述したようにアメリカ人の「フロンティア」精神がコロンビア川のサケを収奪し、その次にはアラスカへと触手を伸ばしていった歴史と重なる。

経済面でも環境面でも「持続可能な漁業」を達成する上では、環北太平洋の先住民社会が主導する国際的な超学際ネットワークを整備する必要があるのではないだろうか。フィンランド・カレリア地方の環境運動家が始めたスノーチェンジ協同組合のように、コミュニティの漁業を環境汚染から守るための活動が先住民運動と連携して、グローバルな影響力をもつようになった例もある(Snowchange Cooperative / ウェブサイト)。2012年には環北太平洋の先住民社会におけるサケ文化に関する論集が編まれた(Colombi and Brooks 2012)。また、2014年には、岸上伸啓とディヴィッド・ケスターが企画した「北太平洋沿岸諸先住民文化の比較研究—先住権と海洋資源の利用を中心に—」という国際シンポジウムが国立民族学博物館で開催されており、環北太平洋における海洋資源利用を先住民と非先住民の協働のもとに学際的に究明する体制作りの第一歩が始まっている(岸上 2015)。気候変動とグローバル化の嵐を乗り越えて100年後もサケを食べることができる世界を目指して、さまざまな文化、国籍、職業をもつ人々がどのような協力関係を築くことができるのか。私は、これが北極域研究における喫緊の課題であると思う。

謝辞

本稿は平成30年度北極域研究共同推進拠点・共同推進研究「北極域における人新世の生業システム」の成果の一部である。本稿のもととなった現地調査および討議は、アメリカ合衆国立科学財団(助成番号:1523189)、科学研究費補助金(助成番号:17H00949)、北極域研究推進プロジェクト(ArCS)テーマ7の支援を受けておこなわれた。本稿の執筆にあたって、ヘザー・スワンソン氏、野口泰弥氏の貴重な助言を得た。また、匿名の査読者2名によるコメントも有益であった。記して謝意を表したい。本稿の内容は、既出版の論文(近藤 2016a)と部分的に重複する部分があることをあらかじめ断っておきたい。

注

- 1) 北海道立北方民族博物館では、「アップパークスコクィム」という表記が用いられている。「ディチナニク人」の名称について、近藤2016a:81を参照のこと。
- 2) これらの調査にあたって、どのような手続きが取られたかについてはSattler et al. 2013が詳しい。
- 3) また、クスコクィム川上流域ではないが、カリン・ホフマンら (Halfman et al. 2015) は、シロザケの遺骸が11,500年前のアップワード・サン川遺跡 (タナナ川流域) で発見されたことを報告している。
- 4) なお、私は、カリブー個体数の減少の理由として、人々が解体中に血を地面に流してはならないという禁忌を守らなくなったからであるとニコライ村の村人から聞いたことがある。
- 5) アメリカ合衆国による排他的経済水域の設定後、日米漁業協定 (1977年) が定められ、1977年から1988年まで一定の入漁料を支払った日本の漁業者は割り当て漁獲量を上限として米国の排他的経済水域内で操業をおこなうことが許されていた。
- 6) しかし、アラスカ先住民は、日本人に対して悪いイメージを抱いているだけとは言えない。私はアラスカ大学在学中に日本文化への強い憧れを表明するユピック・エスキモーの若者に出会ったことがある。
- 7) この時、私はニコライ村の出席者とともに会議に出席していた。私が日本人であると名乗るまで、「アジア人」が会議に出席していることに気付かなかったようだ。私は、この代表者に対して会議の中で「アジア人の漁業が問題であるのであれば、アジア人の漁業者と話を持つ機会を作るべきではないか」と聞いた。代表者は、「自分の上司から許可を得られるのであればそのような機会を設けたい」と回答している。

参考文献

(英語文献)

Arnold, David F.

2008 *The Fishermen's Frontier: People and Salmon in Southeast Alaska*. University of Washington Press: Seattle

Clark, John H., Andrew McGregor, Robert D. Mecum, Paul Krasnowski and Amy M. Carroll

2006 The Commercial Salmon Fishery. in Alaska. *Alaska Fishery Research Bulletin* 12(1):1-146

Collins, Raymond

2004 *Dichinanek' Hwt'ana: a History of People of the Upper Kuskokwim Who Live in Nikolai and Telida*. National Park Service.

Colombi, Benedict J. and James F. Brooks eds.

2012 *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*. School for Advanced

- Research Press: Santa Fe
- Halffman, Carrin M., Ben A. Potter, Holly J. McKinney, Bruce P. Finney, Antonia T. Rodrigues, Dongya Y. Yang and Brian M. Kemp
- 2015 Early Human Use of Anadromous Salmon in North America at 11, 500 y ago. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 112(40) : 12344-12348
- Halffman, Carrin M., Robert Sattler and Jamie Clark
- 2014 Bone Collagen Stable Isotope Analysis of Three Prehistoric Humans from the Upper Kuskokwim Village of McGrath, Western Interior Alaska, A Paper Read at the 41st Annual Meeting of the Alaska Anthropological Association, Alaska, Fairbanks
- Holen, Davin L., William E. Simeone and Liz Williams
- 2006 *Wild Resources Harvests and Uses by Residents of Lake Minchumina and Nikolai, Alaska, 2001-2002* (Technical Paper 296): Alaska Department of Fish and Game: Juneau
- Hosley, Edward H.
- 1966 Factionalism and Acculturation in an Alaskan Athapaskan Community. Ph.D. Dissertation, University of California Los Angeles
- 1977 A Reexamination of the Salmon Dependence of the Pacific Drainage Culture Athapaskans. In Helmer, J., Van Dykes, S. and F. J. Kense eds. *Problems in the Prehistory of the North American Subarctic: the Athapaskan Question*. Department of Archaeology, University of Alberta: Calgary pp.124-129,
- Osgood, Cornelius
- 1936 *The Distribution of the Northern Athapaskan Indians*. Yale University Press : New Haven
- Pollock, Michael M., George R. Pess and Timothy J. Beechie
- 2004 The Importance of Beaver Ponds to Coho Salmon Production in the Stillaguamish River Basin, Washington, USA. *North American Journal of Fisheries Management* 24:749-760
- Riordan, Brian, David Verbyla and A. David McGuire
- 2006 Shrinking Ponds in Subarctic Alaska Based on 1950-2002 Remotely Sensed Images. *Journal of Geophysical Research* 111: G04002
- Sattler, Robert A., Thomas E. Gillispie, Vicki Otte, Betty Magnuson, Ray Collins and Kristi Harper
- 2013 Tochak McGrath Discovery: Precontact Human Remains in the Upper Kuskokwim Region of Interior Alaska. *Alaska Journal of Anthropology* 11(1-2):185-186
- Schneider, William S.
- 2012 *On Time Delivery: the Dog Team Mail Carriers*. University of Alaska Press. Fairbanks

Selkirk First Nation

n.d. *Keeping Our Traditions at the Fish Camps: Our Ancestors' Gift to Our Youth*.

Snowchange Cooperative

2018 "Snowchange Cooperative website."

<http://www.snowchange.org/> (Accessed November 5, 2018)

Sparck, Harold

1987 "Japanese Salmon Fleet Threatens Yukon Native Economy." *Cultural Survival Quarterly* 11(2):Page Number Unknown.

<https://www.culturalsurvival.org/publications/cultural-survival-quarterly/japanese-salmon-fleet-threatens-yukon-native-economy>

(Accessed November 5, 2018)

Stokes, Jeff

1985 *Natural Resource Utilization of Four Upper Kuskokwim Communities*. Alaska Department of Fish and Game Technical Paper #86.

Tanana Chiefs Conference

2015 *The Council* (Special Subsistence Issue). 39(1)

Tape, Ken D., Benjamin M. Jones, Christopher D. Arp, Ingmar Nitze and Guido Grosse.

2018 Tundra be Dammed: Beaver Colonization of the Arctic. *Global Change Biology* 24(10): 4478-4488.

Woelfle-Erskine, Cloe and July Cole

2015 Transfiguring the Anthropocene: Stochastic Reimaginings of Human-Beaver Worlds. *Transgender Studies Quarterly* 2(2):297-316

(日本語文献)

井上敏昭

2008 「社会資源としてのサケ：ユーコン川上流域の先住民社会におけるサケの重要性とそれをとりまく諸問題」 岸上伸啓編『海洋資源の流通と管理の人類学』（みんぱく実践人類学シリーズ3）明石書店：東京 pp. 41-68

2015 「サケ資源の管理権限の獲得を目指すユーコン川流域先住民社会の取り組み」 岸上伸啓編『環北太平洋地域の先住民文化』（国立民族学博物館調査報告 132）国立民族学博物館：吹田 pp. 181-202

岡田宏明

1992 「南西アラスカ・エスキモーの文化伝統」 岡田宏明、岡田淳子編『北の人類学』アカデミア出版：京都 pp.7-30

岸上伸啓編

2015『環北太平洋地域の先住民文化』(国立民族学博物館調査報告 132) 国立民族学博物館：吹田

近藤祉秋

2014「北方樹林の愛鳥家：内陸アラスカにおける動物を殺す／生かすこと」『文化人類学』79(1):48-60

2016a「アラスカ・サケ減少問題における知識生産の民族誌：研究者はいかに関わるべきか」『年報人類学研究』6:78-103

2016b「狩猟・漁撈教育と過去回帰：内陸アラスカにおける生業の再活性化運動」シンジルト，奥野克巳編『動物殺しの民族誌』昭和堂：京都 pp. 293-326

日本貿易振興機構

2008「アラスカ水産業の現状と日本市場の位置づけに関する調査」
https://www.jetro.go.jp/ext_images/jfile/report/07000164/alaska.pdf
(2018年11月5日閲覧)

野口泰弥

2018「イントロダクション：アラスカと日本人の関係史：戦前・戦中までの先住民との接触を中心に」『第33回特別展North to the Future：日本人が出会ったアラスカ』北海道立北方民族博物館：網走 pp. 4-9

(2018年12月27日採択)